# 近隣・友人関係とエスニシティ

## ——アメリカ東部郊外住宅地の事例研究——

"Neighborhood, Friendship and Ethnicity in a White Suburban Community on the East Coast of the United States"

馬　場　優　子

Yuko M. Baba

## I　はじめに——目的と方法——

本稿の目的は，ニューヨーク市郊外の住宅地の実地調査に基づき，多民族的地域社会（マルチエスニック・コミュニティ）における個人の社会関係形成にエスニシティがどのように作用しているかを微視的に分析し，それをふまえてエスニシティがいかに多元性をもっているか考察することである。

アメリカでは，1960年代に急激に興隆した黒人の市民権運動に刺激され，70年代に入ると黒人以外の有色人種系諸民族，さらにはコーカソイド系諸民族集団による社会的・経済的平等を求めての運動と文化的自己主張が進行し，それに伴って，「メルティング・ポット論」から文化的多元主義へと志向の転換が起こったと言われている。こうしたイデオロギーの変化が見られる場合，必ずと言って良いほどその基本概念への問いかけが生ずる。従来，出自・文化・言語等を共通とするという客観的特性のみを指標としていた「エスニシティ」もその例外ではない。

今日的な現象としてのエスニシティはその多面的性格から，概念範疇規定に加えて，民族的自己規定（ethnic identity）や民族集団範囲規定（ethnic boundary）の問題，政治権力および経済的資源獲得をめぐっての抗争過程に生ずる政治的利益集団化の問題などの側面に関心の枠が拡げられた(1)。それに伴い，主観的・潜在的な存在様態のエスニシティが，同時に客観的条件や外的状況に相応して顕在化することをも射程に入れた，いわば動態的な概念として深められた点が注目されよう。

この点でバース（F. Barth）が大いに貢献したことは周知の事実である。彼は，経験的事実から，エスニシティを他集団との接触に伴う相互行為（interaction）の下で生ずる自己規定ないし自己の範疇的認識という視点から捉え，包括的な社会システムの下で繰り返される相互行為に対して民族集団間の境界が維持されるメカニズムに関心をもった(2)。またこの点ではコーエン（A. Cohen）も同様に，ひとつの社会的枠組の中で異なる集団の成員と相互行為的状況にあることをエスニシティの重要な側面として指摘している(3)。重要なことは，エスニシティが他の集団との接触の様態と不可分の関係にあるということと，複数の同価集団がひとつの社会システムを構成している場合，それらの集団の相互作用の結果，より複雑ないくつかのレベルでのエスニシティがあり得るということ，つまり，エスニシティの重層性，多元性が導き出されたということである。

ところで，エスニシティの問題はアメリカ社会を理解するうえで避けて通ることのできないものである。従来，アメリカ社会の多民族性は黒人，アメリカ・インディアン，アジア系移民，ヒスパニックス（Hispanics）等のマイノリティの問題に縮小されてきた。しかし，文化的多元主義の時代を迎えて，マジョリティである白人の内部においてもエスニシティが重要な意味をもっていること，またそ

れを等閑視してはアメリカ社会の理解が困難であることがますます明白になりつつある。

このような問題意識に基づき，本稿では白人が大半を占める郊外コミュニティの実証研究によって，アメリカ社会においてエスニシティがいかに重層性をもっているか，個々の人々に対してエスニシティがどのような影響を与えているかを明らかにしたい。

郊外居住者の人間関係の中で選択的行動が集約的に表現されるのは近隣関係と友人関係である。本稿ではこの二つの方向における個人のネットワークに焦点をあて，意志決定に作用するエスニシティの意義を浮き彫りにしてゆく。従ってこの場合のネットワークとは，複数の人間が織りなす全体としてのネットワークではなく，二人の人間の間に成立した連結線（dyad）としてのそれを意味することとする。

本稿に用いるデータは東部の一郊外住宅地において筆者が行なった実地調査により得られたものである。調査は1979年9月より参与的観察を始め，1981年4月から集中的聞き取り調査を同年8月まで行なった。聞き取り調査は，市長，福祉関係および青少年関係の行政官，警察署青少年係官，各宗派の聖職者，小学校・中学校・高等学校各校長，各校父母会会長，アイルランド系民族組織代表，イタリア系民族組織代表，市史編纂家，諸任意集団（voluntary association）代表，近隣組織（neighborhood association）代表等を主たる対象とし，さらに，近隣関係・友人関係に関しては別に51世帯の主婦（30歳代・40歳代を中心とする）を選んで行なった。主婦によって語られたことをその世帯の近隣関係・友人関係と見なしたのは，アメリカの夫婦の社会的ネットワークは共通する部分が非常に大きいことと[4]，何よりも主婦の方が地域社会に根ざした生活をしていることが理由としてあげられる。なお，主婦のインフォーマントが地理的に偏らぬよう，また民族的背景（ethnic background）も出来る限り平均的に分布するように努めた。しかし，前項に関してはインフォーマントを4小学校区からほぼ同数ずつ得られたものの，民族的背景を平均的に分散させることは困難だった。中産階級にとり民族的背景という非常に個人的な事柄について尋ねられることは歓迎されざることである。本調査でもプロテスタントやカソリックから拒絶されたケースが多々ある。逆にユダヤ系は協力的で，ネットワークを利用してインフォーマントをつぎつぎに紹介してくれた。その結果，主婦の聞き取り調査の対象は，ユダヤ系24名，カソリック13名，プロテスタント14名となった[5]。

## Ⅱ　調査地概観

陽光を浴びて緑色に照り返る前庭。その奥には木立ちに囲まれた瀟洒な家屋が見え隠れし，さらにその向こうには緑色の絨毯を敷きつめたような広々とした裏庭が拡がる。

これはアメリカの郊外住宅地でよく見られる住宅のたたずまいである。アメリカ人の多くが，こうした住処を得て中産階級的生活を送ることをひとつの夢として描き続けてきた。しかし，このような住宅が連なる郊外住宅地では，人々は常に孤独と隣り合わせている。家と家の間に拡がる芝生は，塀なくしても相互のプライバシーを守るのに充分であり，また，人々は隣りのブロックに行くためにさえ車を使うから，犬の散歩をする老人，乳母車を押して乳児の散歩をする母親，ジョギングをする人などごく稀れな例を除けば，人の姿を見かけることがない。ましてや人の話し声が聞こえてくることもなく，さながら緑に閉ざされた生活を強いられているようである。

こうした郊外住宅地のひとつである調査地イーストウッド（仮称）は，ニュージャージー州北東部のバーゲン郡（カウンティ）北部に位置する，ハドソン河西岸の断崖沿いに南北に1.5マイルほど拡がる面積約4.5平方マイルの自治区（ボロ：borough）である。ニューヨーク市マンハッタンとニュージャージー州を結ぶジョージ・ワシントン橋から北へ6マイルの所にあり，ニューヨーク首都圏（メトロポリタン・リージョン）の[1]一部

を成している。マンハッタンのオフィス街まで車で2，30分ほどの距離にあり，ニューヨーク市までの直通バスが町の主な通りを1時間に2，3本の頻度で通っているので，バスを利用してマンハッタンへ出るのも容易である。この町の住民が“the city”と言えばニューヨーク市を指す。町の中心を南北に走っている鉄道線路は，現在は貨車専用となっているが，かつてはマンハッタンへの通勤者の重要な交通手段として役立っていた。その鉄道のかつての駅舎（現在はブティックとして利用されている。写真①参照）が建っている町の中心部が最も低地で（海抜30フィート），そこから東へ，ハドソン河断崖（海抜400フィート）に向ってなだらかな丘陵が続き，また西に向っても低いスロープ（海抜150フィート）が描かれている。

旧駅舎付近には小売店が立ち並ぶ通りが2本交差して小規模な商店街を形づくっている（写真②参照）。住民はそこを「ダウンタウン」と言う。ダウンタウンおよびその周辺にはスーパー・マーケットが2店，銀行が2店，バー1軒，美容院，理髪店が各1軒，ガソリン・スタンドが数軒，その他薬局，文具店，洋品店等々があり，日常生活のためには町内の商店で充分である。だが人々は月に2，3回は車でいずれも2，30分の所にある3ヶ所の大規模なショッピング・センターへ行く。そこには全国的なチェーン店である有名デパートやディスカウント・ショップが集まり，また，娯楽施設やレストランもあって，人々は買い物の序でに楽しく過ごすことができるのである。

アメリカの郊外住宅地は，1950年代の郊外神話（suburban myth）で語られているように，職業，社会経済的地位，エスニシティ，生活スタイル等において同質的であることが主要な特徴であると言われている。しかし，「遅れてやって来た」民族集団（ethnic groups）もアメリカ定着と共にその内部に階層分化が生じ，民族的背景別に都市の一隅に吹き溜まりのように住みついた人々の中から世代交替を重ねるにつれて社会経済的上昇移動の機を得て郊外に移り住む人々も増加して，郊外住宅地は決して白人アングロ・サクソン・プロテスタント（WASP）の独占地域ではなくなってきた。しかしながら，そもそも郊外住宅地は中産階級世帯のコミュニティとして発展したものであり，社会経済的階層という側面から見れば多くの郊外コミュニティは依然として中産階級的同質性を備えている。その上でなお，中産階級の中でも中流から上流層が大半を占めるコミュニティと下流から中流までのコミュニティへの分化が見られるというのが現状である。ホワイト（W. H. Whyte）が*The Organization Man*の中で分析したPark Forestは後者の型，シーリーその他（J. R. Seeley et als.）が調査したCrestwood Heights[2]も本稿が対象とする調査地も前者の型に属する。

写真①

写真②

ヨーロッパ人の侵入以前はニュージャージー一帯はアルゴンキン系インディアンの居住地域であったが，17世紀にニュー・アムステルダム（ニューヨークの旧称）の総督ヴァン・コートラ

ンドの所有下に入り，オランダ人とユグノー派フランス人が入植した[3]。18世紀前半にコートランドの所有地は3人の娘に相続され，イーストウッドの地積のほとんどが娘のひとりの所有地の一部となった。その後，イギリス人ジェームズ・ジェイが大地積を取得し，イーストウッドはイギリス人開拓者の時代に入る。そして19世紀半ばに鉄道が開通すると，ニューヨークへの通勤者が住民として住むようになった。1880年代末のイーストウッドの不動産広告には，「投資に最適。ニューヨークから鉄道で40分。にも拘らず大自然に恵まれている」という宣伝文が見られる。

1880年のセンサスによると，イーストウッドの職業構成は，専門職・技術職・管理職が約20％，ホワイト・カラー10％強，農業7％，ブルー・カラー33％，家事労働（召使等使用人）が30％となっており，後の郊外住宅地に見られる同質性に対して，かなり異質な，多階層を含む地域社会を形成していたことがわかる。

20世紀初頭のニューヨーク方面へのトロリーの開通により，ニューヨークへの交通の便がより改善された。また折から始まった1920年代の郊外土地開発ブームに乗って，イーストウッドも住宅地化が進行し，人口が急増する。それに先がけてこの町は初めてゾーニング・コード[4]を制定し，鉄道線路沿いの低地に工場，商店街，低所得層向け住宅（写真③参照）を配置し，町全体の面積の90％以上を上層および中層中産階級向け1戸建住宅地域とした。郊外の土地ブームは，1930年代の大恐慌時代にしばしば大地積所有者が固定資産税不払いのために土地を手放さざるを得なかったという状況によって拍車がかかる。またハイウエイの建設が進み，鉄道の時代から自動車の時代へ転換したことも，郊外住宅地化（suburbanization）を押し進めることになった。イーストウッドでは民間の開発業者がそうした土地を買収して小区画に区切り，1934年に改訂された新しいゾーニング・コードに則って，1区画の面積，価格，部屋数，設備等において均一化された分譲住宅を開発していった。従ってこの頃からイーストウッド内部が地域によって以前にも増して明白に中産階級上層，中層，下層向けの地域へと分化してゆくのだが，コミュニティ全体としては上層から中層の中産階級を主流とする住宅地としてデザインされた。

その結果，1940年のセンサスでは専門職・技術職・管理職が36.5％，ホワイト・カラーが37.1％，ブルー・カラーは14.0％，家事労働が10.2％という職業構成が見られ，このコミュニティの同質的傾向がうかがわれる。第二次大戦後，アメリカの郊外住宅地が最大の発展を遂げる時代を迎えて，このイーストウッドもそれまで未墾の自然林に覆われていた東部丘陵地と，同じく未開拓であった町の西南部を上層中産階級向けに開発することになる。1戸当たりの地積が2分の1エーカーないし1エーカーで分譲されたこれらの地域に転入してきたのはほとんど上流中産階層の専門職・技術職・管理職の家族であった。以後，1970年代末に至るまでに，東部丘陵地帯は，コミュニティ全体を論争に巻き込んだ挙句，結局，一部保存されることになった広大な自然林を残して，そのほとんどが住宅地となるのだが，専らこうした階層に住宅を供給することになった。その中には，戦後，急速に階層分化を生じたユダヤ系の富裕層が多く含まれていた。（写真④⑤は東部丘陵地の上層中産階級向け住宅，⑥は西部微高地の中層中産階級向け住宅である。）

写真③

1980年センサスによれば，専門職・技術職・管理職が50％以上を占め，ホワイト・カラーが約

30%，職人等中産階級下層に入るブルー・カラーが約20%という構成になっており，このコミュニティが全体として上層および中層中産階級という社会経済的同質性を強く備えていることを示している。

このコミュニティの専門職，技術職，管理職，ホワイト・カラーの大半はマンハッタンへ通勤している。まさにニューヨーク市の外側にありながらニューヨーク市に依存している郊外住宅地なのである。当地で代々，商店を経営している若干の住人を除くと，そのほとんどはかつてニューヨーク市の市民であり，子どもの学齢期に当町に転入したと見て良い。筆者が聞き取り調査をした人々の結婚後の居住地の変遷はおおよそ次の三つの型に分けられる。㈠ニューヨーク市内のアパートからイーストウッドへ　㈡ニューヨークに近い，バーゲン郡の都市化した他の市や町のアパートないしガーデン・アパートからの転入　㈢ニューヨーク市から他州あるいは同州他郡へ転出し，その後，当町へ転入。㈠が約半数を占め，㈡と㈢で残りを折半していた。この町を居住地として選んだ理由として，ニューヨーク市への至近性と交通の便の良さ，それに公立学校の質の良さが必ず挙げられる[5]。この町は子育ての地なのである。そして，夫婦にとってはほゞ最終の地であり，離婚と転勤がなければこの先は老後のフロリダへの転住が控えているのみである。

写真④

写真⑤

写真⑥

この町の人口は約13500人で，1980年センサスによれば白人が約95%，アジア系が約５%で，その他に若干のアルメニア人，インド人，黒人などが住んでいる。アジア系は韓国人，中国人，短期滞在型の日本人を主とし，ごく近年，急増した。黒人の移入についてはコミュニティ全体として非常に拒絶的である。センサスでは約80名ほどの黒人居住者がいることになっているが，その多くは富裕な白人家庭の住み込み使用人で，その他に若干の黒人家族と黒人白人の通婚夫婦がいるのみである。

白人の内訳は，センサスには生国による分類のみ記載されておりエスニシティ別人口を公的数字から捉えることは困難であるが，公的機関の人々の明言するところによれば，この町のユダヤ系人口は約30%，イタリア系は約20%，アイルランド系は約10%なので，残りの35%がプロテスタント系白人と見なして良いと筆者は考える。

この場合，白人プロテスタントを WASP としない理由は，一つには、出自が厳密な意味でアングロ・サクソンではない者も含まれるからである。例えば中には，〈イギリス人とスコットランド人とウェールズ人とオランダ人〉，〈ポーランド人とドイツ人とフランス人とイギリス人とアイルランド人〉，〈イギリス人とフランス人とアイルランド人〉，〈ドイツ人とイギリス人とスコットランド人とアイルランド人とウェールズ人〉等々，さまざまな出自を持つ人々がいる。また，移民後，世代を経る過程で民族集団間の通婚が頻繁に生じ，その子孫が両親のどちらの民族集団に対して自己同一化するかは，母系出自を辿るユダヤ系を除けば規則性がなく，両親の力関係の如何や両親のどちらが民族的自己規定をより強く保持しているかという，かなり主観的な規準に依拠している。従って，"WASP"を広義に用いればこうした出自の白人プロテスタントもこのカテゴリーに入れて良いが，彼らが全て WASP と自己規定してはいないので本稿では「プロテスタント」としておく。

また，イタリア系とアイルランド系は，それぞれ固有の民族文化の保持あるいは当該民族集団の親交を深めることを目的とする組織をいくつか結成してはいるが，日常生活においては両者ともにその種の民族的組織よりもむしろカソリック教会の方に強く自己同一化している。しかも両者は同一の教会に所属しているため，信仰の世界を共有するのみならず世俗的世界においても相互交流が濃密で，アイルランド人あるいはイタリア人としてよりも「カソリック」として他から一括範疇化され，かつ自己規定する傾向が強い。

以上のような理由から，イーストウッドの住民の主要部分はプロテスタント（人口の35％），カソリック（30％），ユダヤ系（30％）の３群から構成されると捉え，本コミュニティにおける社会的ネットワークとエスニシティを考えてゆく際の基本的範疇をこの３つの宗教エスニシティに置く。

## Ⅲ　近隣関係とエスニシティ

"neighborhood" という言葉は非常に多義的で，当調査地においては，同一ディベロッパーが開発した分譲地の住民や近隣のいくつかの道路沿いの住民が結成する "neighborhood association" が意味するように，戸数100戸以上にもなる neighborhood から，向こう三軒両隣りを指すそれもある。本稿では後者の，つまり「近所」という意味で使う。すなわちここで近隣関係というのは，道路を挟んで向かい合った数軒――大体，６軒から10軒ぐらいまで。インフォーマントの近隣意識に応じて若干異なる――の間での関係を意味する。この地理的範囲を人々はしばしば「ブロック」（block）とも言う。

当コミュニティにおける近隣関係は，(A)人々の相互接触の度合いが大きく友好的な地区と(B)隣人同士の接触のあまりない地区の二つに分類される。Ａタイプにも２種類あり，当該分譲地に同じ頃入居した１代目所有者から成り，社会経済的階層やエスニシティに関してほぼ同質的であるのみならず，ライフ・サイクルも同じような段階にあり，親も子も同年齢集団を形成している場合(a)と，エスニシティには多様性があるが，社会経済的に中産階級の中層から下層にかけての隣人たちから構成され，ブルー・カラーの生活スタイルが反映されている場合(b)に分けられる。Ａ型のブロックは，人々は相互に職業，エスニシティ，子ども，その年齢など全て知り尽していて，子ども達は誕生パーティに招き合い，親はブロック・パーティをするという，親も子も非常に高い頻度で接触する地区である。次のＭ夫人の話からもＡ型ブロックとＢ型ブロックの対照性が鮮明になるであろう。

> Ｍ夫人（33歳　最近，町内Ａ－ｂ型地区からＢ型地区に転居）：「コロニアル・ロードは子どもにとってはとても良い所だったわ。私にとっては煩わしかったけど……。人々はお互いの家族のことを何でも知っているのよ。私達が引越したばかりの頃，家の前にトラックが停っていたら，誰かが『お宅の商売は何な

の？』と電話してきたわ。そんなブロックなのよ。……こっちに引越して来て良かったことは，近所の人達とは“Hello. How are you？”以上の関係にならないこと。本当に嬉しい。」

Aタイプのブロックは当コミュニティでは稀れであると多くのインフォーマントが語っているが，確かに筆者が調査した51のブロックを見てもそのうち五つのブロックがこの型に相当するにすぎず，圧倒的にBタイプが多かった。

B型のブロックは社会経済的には同質的であってもエスニシティに多様性が見られる。分譲地にほゞ同時に入居した初代所有者にとって代った新来の居住者は，隣人とは異なるライフ・サイクルの段階にあり，また，しばしばエスニシティも異なる。こうした住人の交替が累積して近隣関係が変化し，A型からB型へ変貌することになる。

D夫人（42歳）：「この町で生まれ，育ったのだけど，この辺りはすっかり変わってしまったわ。私が子どもの頃，毎年夏になるとこの地区の人々皆でピクニックをしたり，クリスマスには丘の頂きに大きなクリスマス・ツリーを飾って，隣人のひとりがサンタ・クロース役になり，子ども達は皆，大きな靴下をもってプレゼントをもらいに集まったものよ。その頃はクリスチャンだけだったからそういうことができたのね。多勢の新しい人々，つまりユダヤ人が入って来てからは，かつての習慣はすっかり廃れてしまったわ。ブロック・パーティを計画しても参加する人がいないのよ。今ではこの通りに誰が住んでいるのかさえ知らないわ。隣りと向いぐらいは知ってるけど……。」

B型ブロックでは全般的に相互交流が少なく，「隣りの家に今，“For Sale”の看板が出ているけど，前に住んでいた人は見たこともなかった。いつ引越したかも知らないわ」「向いの家の人とは，車を出すのが偶然，同時だった時に顔を合わせると，“Hi!”と言うぐらい」「隣家には誰が住んでいるのか知らないわ。全然，姿を見せないんですもの」「隣りの家の娘さんが今年，高校を卒業したのを知ってるわ。新聞[1]で読んだから」などの表現から推察されるように，孤立性・閉鎖性が特徴的である。筆者が実験的に，筆者と同じブロックの12家族を招待して野外パーティを催したところ，周囲との交流の全くない2家族は欠席した。残り10家族は，いずれも，少なくとも6，7年は当地に居住していたにも拘らず，初対面の組合わせはいくつもあった。そしてパーティの間中，日頃，行き来している者同士で固まってしゃべっていた。

孤立性が強いとは言え，大部分の家族は主婦を中心にして近隣者の中に何らかの社会的ネットワークを作りあげているのも事実である。本章ではこのBタイプの近隣地区においてどのような社会的ネットワークが形成されているか考察する。

社会的ネットワークもその部分である二者間関係（dyadic tie）も交換体系によって維持されている。実際に交換が行われるのは，財とサーヴィス，思想と情報，心理的支持，それに社交[2]であり，アメリカの住宅地ではこれらの交換はシンメトリカルなので，対等な人間関係が維持される。

当調査地の近隣地区における個々の人間関係は交換の内容から次の五つに分けることができよう。

Ⅰ　姿を見たことはあるがめったに見かけない。もしくは会ったこともない。

Ⅱ　相手の職業，エスニシティ，宗教，おおよその年齢，子どもの人数と顔を知っている。会った時は“Hi! How are you？”の挨拶はする。遠くからの場合は手を振る。出会った時に少し立ち話をすることもある。

Ⅲ　相手の家族が休暇旅行に出かける時には鍵を預かり，ペットに餌を与え，郵便物や新聞を預かって家全体の監視をし，防犯に努める[3]。日常用品（椅子，テーブル，食器，芝刈機等）や食料

品（バター，ミルク，塩，砂糖，小麦粉，酢等），それに少額の現金（せいぜい5ドルまで）の貸借をする[4]。小さな子どもがいる場合は子守りの交換（child care exchange）をすることもある。

Ⅳ　時々，夕食やティー・パーティへの招待という形の社交（socializing）をする。

Ⅴ　「友達」と言えるほど親しい間柄である。

ⅠからⅤに至る関係は相互行為が疎から密へと進む段階区分でもある。Ⅰの関係では何ら相互交流は生じていない。Ⅱは，相手に関する基本的な，個人的情報は得ているが，単なる会釈や挨拶の段階に過ぎず，意識的な相互行為は行なわれていない。偶然，出会った時のみ，少し世間話をするが，それ以上の交流は見られない。Ⅲは日常的な相互援助・協力の関係である。相互の信頼が基盤にあって成り立ってはいるが，情緒的交流（affectivity）を伴う信頼ではなく，あくまでも遅くない時期に等価の返済がなされる互酬性原理を共有していることへの信頼に基づいたものである。このような関係にある隣人を"friendly neighbors"，"nice neighbors" と表現しているが，基本的には手段的な（instrumental）関係が一時的に打ち立てられているに過ぎない。

> B夫人（35歳）：「子守り交換をしていたお宅のお子さんの仲良しが変ってしまい，奥さんはそちらに子守りを頼むようになりました。私にはあまり頼まなくなったので，私もあちらに頼まなくなったのです。evenでなくては……。」

> C夫人（35歳）：「金曜日の夜，私達はパーティに出かけるのにどうしてもベビー・シッターが見つからず，窮余の一策で，いつも頼んだことのない向いの家に子ども達を泊らせてもらいました。翌朝，私は気がとがめたので，その家の子ども達も全員我が家に連れて来て，私の家で朝食をさせました。」

このように，貸借のバランスを崩すと近隣の人々との間に摩擦を起こすので，人間関係に関しては非常に気を遣い，またそのための技術を必要とするのである。

Ⅳの社交は，Ⅲのように主として主婦の間の裏口での交流ではなく，双方ともに夫婦単位の正式な招待であり，積極的な歓待であることを意味している。この場合，初めての訪問時には台所，食堂，浴室，客室，寝室に至るまで披露され，その家の夫婦のプライバシーの領域や生活の隅々まであらわにされるのだから，何らかの内面的相互作用が前提となっていると考えられる。ただし，この場合の社交も互酬性の原理に則って行なわれる制度であり，やはり等価の返済を前提として成り立っている点ではⅢと共通している。物の貸借も子守りの交換も，歓待の交換も，互酬性のバランスを崩すことは近隣関係への致命的な挑戦と見なされ，一瞬にして nice neighbors ではなくなってしまう。仕事を持ち，多忙になった主婦の家族がしばしば近隣集団から疎外されるのはそのような時である。このように，近隣関係は，いかに頻繁に交流していようとも，基本的には手段的な動機を基盤として成り立っており，ガンス（H. J. Gans）の言うように，「完全に第一次的（primary）でもなく，第二次的（secondary）でもない，第一次的であるかのように装っている第二次的な接触による擬似一次的（quasi-primary）」[5]な関係である。主婦の突発的な事故や病気など緊急事態が生じた時に例外的な援助を請うのは隣人ではない[6]，というのも当然のことであろう。

なお，ⅢとⅣの関係が重複する場合もある。

最後に，Ⅴのレベルの関係にある人々は「親しい関係」（close relationship）と表現され，「友達」の範疇に入れられる。アメリカ中産階級にとって「友達」とは，次章で詳しく述べるが，自己の目的を達成するための手段的動機ではなく感情的・情緒的紐帯に基づいた関係を意味する[7]。このカテゴ

表1

| 近隣関係 / エスニシティ | Ⅴ | Ⅳ | Ⅲ | Ⅱ | 近隣関係 / エスニシティ | Ⅴ | Ⅳ | Ⅲ | Ⅱ |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| P－P | 2 | 9(11)** | 6* | 6 | J－中国人 | | | | 2 |
| C－C | 3 | 2(5) | 5 | 5 | C－日本人 | | | | 3 |
| J－J | 3 | 10(13) | 13 | 6 | C－印度人 | | | | 1 |
| P－C | | 7 | 4 | 15 | J－アルメニア人 | | | | 1 |
| C－J | | 10 | 13 | 10 | C－アルメニア人 | | | | 2 |
| J－P | | 6 | 4 | 8 | C－中国人 | | | | 1 |

P：プロテスタント
C：カソリック
J：ユダヤ系
*Ⅲの数字にはⅣと重複するものも含まれる。
**Ⅳの（　）内の数字はⅢとの重複を含む。

リーに入る近隣関係は極めて少なかった。いかに日常的相互行為が濃密であっても，直ちに友達と見なす訳ではないのである。

ところで，ブロック・パーティをする五つのA型ブロックを除いた46のブロックに分布する46人の主婦が，ⅡからⅤまでの関係に該当する隣人として言及した者の総数は157であった。この数字から見ると，各人は少なくとも会釈したり挨拶したりする近隣者を平均3.4家族しか持っていないことになる。彼らの概念では近隣地区すなわちブロックには6軒から10軒ぐらいが含まれるから，B型のブロックでは平均してブロックの半数かそれ以上の家族とは全く面識がなかったり，ほとんど見かけることもない，すなわちⅠの関係であることが分かる。

前述のようにB型のブロックは多民族的なので，157の二者間関係はさまざまな民族的背景を持つ者同士の間に成り立っている。それらがⅡからⅤ段階までいかに分布しているかを示したのが表1である。

表1から次の諸点が導き出される。

1　カソリックとユダヤ系は，Ⅱの会釈・挨拶行動レベルの親近性の弱い関係であれば，中近東出身者や東洋人などの民族的背景をもつ近隣者との間にも樹立している。

2　プロテスタントはⅡのレベルにおいてもプロテスタントとカソリックとユダヤ系しか対象としていない。

3　日常生活における手段的な，物財やサーヴィスの互酬的交換はプロテスタントとカソリックとユダヤ系の間でのみ行なわれる。なかでも，カソリックとユダヤ系の協力関係が顕著に見られる。

4　社交的付き合いも3群内でのみ行なわれる。ここでもまた，カソリックとユダヤ系の親近性が見られる。

5　親近度の最も高いⅤレベルの近隣関係は，プロテスタント，カソリック，ユダヤ系のいずれもそれぞれの群内に限られている。

6　黒人はこれらの関係のいずれにも登場しない。

要するに，隣人関係の中で最も親密度の高い関係はプロテスタントもカソリックもユダヤ系もそれぞれの内部でのみ打ち立てられるが，良き隣人として日常生活において協力し合ったり，時々，歓待し合ったりする関係ではこの３グループの間に相互交流が見られる。ただし，この三者以外のエスニシティの者は除外されている。会釈・挨拶レベルの関係では東洋人などにまで拡大されるが，黒人は排除されている，という近隣関係の構図が描き出されるのである。

## Ⅳ　友人関係とエスニシティ

欧米の社会では“being friends”と“being friendly”は明確に区別される。後者はひとつの態度であり，礼儀作法や慣習に則って相互作用を円滑に進めるものである。また前者は，個人的な領域に関する知識を共有し，相互理解，共感，支持，愛着等個人の内的な相互作用を伴う関係である[1]。

本調査においても，インフォーマントの主婦達はこの二つの言葉の対象となる範疇を明確に区別しており[2]，

“My neighbors aren't my friends, just acquaintances. We rarely get togegher, but we're friendly enough.”

というような言い様にしばしば出会った。前章で述べたように，財や情報や援助の交換を頻繁に行なっている“friendly neighbors”であっても，必ずしも「友達」とは見なしていないのである。

> Ｐ夫人（65歳）：「斜め前の家は私達が引越してきた直後に入居しました。私達の子どもと同じくらいの年の子どもがいたのでよく行き来していて，また私はそこの奥さんとは婦人有権者同盟支部でも一緒に活動していました。それほど共通のものがあった訳ではないのですが一緒に買物に行ったりしました。今でも会えば親しく言葉を交わします。でも友達ではありません。」

> Ｇ夫人（39歳）：「郊外住宅地の人々ってとても用心深いわよ。私達がここに引越して来た当時から“隣人とあまり親しくなると後悔する”という雰囲気がこの周辺には強く漂っていたわ。あまりくっつかないで，距離を置いておくのが一番という訳。その点がニューヨークのアパートの生活と大違いよ。何しろここの人達ときたら，お互いに悪い感情を起こすのを避け合うために物凄く礼儀正しいんだから……。」

友人関係の主な特徴は，まず第１に，手段的な協力や援助の交換ではなく，信頼・愛着・率直さの交換，すなわち，感情的・情緒的交流に基づいているという点である。第２に，共に時を過ごし，共に行動することに楽しさを感じる相手であって，相手との交流が楽しくなければ友達とは考えない[3]。

> Ｈ夫人（47歳）：「今日，スーは体操教室にうちの子も一緒に連れて行ってくれました。一昨日，私は彼女の新しい家を一緒に見に行きました。昨日は，スーは友人が病気だとかで取り乱してやって来たので慰めてあげました。それから，一緒に彼女の庭の草花の手入れをしました。」

友人の中でも「親友」（close friend）はこれらの点で徹底し，とりわけ感情的・情緒的絆が強い。居住地が近いと頻繁に会ったり電話をかけたり，極端な場合は，“lunch together, shopping together”の関係にもなる。だが，通常は「社交」することが第１条件である。すなわち，夫婦単位で集まり，夜や週末や休暇を共に過ごして楽しむ，いわば，日常的な労働や家事などとは異なった状況の下で相互接触し，楽しさを分ち合うのである。ただし，居住地が遠隔地にあって頻繁に社交ができない相手の

場合は，休暇を利用してお互いの家を泊りがけで訪問したり，家族合同で旅行をしたりする。このような夫婦単位の友人関係は2組の夫婦，すなわち4人の気の合った場合にのみ成り立つから，四つの関係のうちのひとつでもうまくゆかなければ成立しない。その場合は夫同士もしくは妻同士が昼間，おしゃべりやお茶を共にして楽しく過ごす友達という例外的形態をとることになる。

> L夫人（48歳）：「夫の友達とは妻も知り合いになり，相手の妻とも友達になります。そして子ども同士も友達になります。妻の友達の場合も同じです。長年経つと，スタートは誰だったのかすっかり忘れてしまうことがよくあります。」

> D夫人（38歳）：「私が気に入った女友達をその夫と共に夕食に招待します。そこでお互いのカップルが気に入ったら，夜，一緒に外出して過ごすようになります。もし，妻同士が気に入っても夫同士が気に入らなかったら，女友達として昼間，付き合うだけの間柄になりますが，親友と言えばふつうは夫婦で付き合いますよ。」

> B夫人（35歳）：「ジェニー夫妻とは，はじめジェニーと私が親しかったのですが，年1回，この町の女性の権利を守る会が開く夫同伴のパーティで私の夫とジェニーの夫マイクが顔を合わせ，その後，彼らは水泳クラブで偶然，出会って話をするうちお互いに気に入ったので，夫婦での社交が始まったのです。」

「社交」はアメリカ中産階級の社会生活の中で不可欠の制度である。大人の世界と子どもの世界が截然と区別されているアメリカの家族は，大人と子どもがそれぞれの役割を果たすことにより協力し合い，かつ，規則を遵守することによって，家族としての統合が維持されているのだが，一方で，大人も子どもも横へ，すなわち外部へと繋がりを拡げてゆく(4)。ここに大人同士の社交やパーティなどと子ども同士の交流が構造化され，週日は仕事・家事・勉強を中心に過ごし，週末は大人も子どももそれらから離れて「遊び」の世界で横の繋がりを再確認するというサイクルを繰り返してゆく。毎週金曜日ともなれば，大人はパーティ，映画その他の娯楽を親友夫婦たちと共に楽しみ，小さな子どもは友達の家に招待されて泊まりに行く（“sleeping over”）か，ベビー・シッターを相手に留守番をする。高校生はデイトやパーティなど大人の社交形態を取り入れ始める。中学生から高校生初期はベビー・シッターとして最も活躍する時期だが，一方で親の監視下から抜け出し，友達とパーティの真似ごとを始める時期でもある(5)。

このように社交は，他の人と相互交流する能力を養い，社会性を発達させるために各年齢階梯に組み込まれたプログラムなのである。親友との社交はその上，心理的支持，情緒的紐帯，それに楽しさを共有する機会であり，彼らの生活の中で不可欠の位置を占めていると言えよう。

表2は，インフォーマントに「親友」をあげてもらい――1人平均数名ずつあがった――，個々の親友と知り合った場もしくは媒介者を3群別に多い順に並べたものである。

ここから次の諸点が導き出される。

1　子どもを媒介とした友人形成が3群に最も顕著に共通している。

2　地理的近接性がきっかけとなった場合がカソリックとユダヤ系で高位を占めているが，プロテスタントにおいても無視はできない。

3　教会を通しての友人獲得はプロテスタントとカソリックにとって重要であるが，ユダヤ系においてもなお意味をもつ。

4　プロテスタントにとっては，クラブ，趣味の同好会，奉仕団体などの任意集団が友人形成の最

表2

| インフォーマントのエスニシティ | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | その他 | 総数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| プロテスタント | 任意集団 (20)* | 子ども(10) 教会 (10) | | 夫 (7) | 近隣 (6) | 友人,職場,大学,高校以前 | 61 |
| カソリック | 近隣** (15) | 子ども(14) | 教会 (9) | 高校 (7) | 大学 (3) 夫 (3) | 任意集団 | 53 |
| ユダヤ系 | 子ども(29) | 近隣 (14) | 職場 (12) | 大学 (10) | 教会 (9) | 任意集団,高校以前,夫,母,友人 | 95 |

* ( ) 内はあげられた「親友」の実数

** 「近隣」には前住地で近隣関係にあった場合も含まれる。

も重要な場となっている。

大人の友人関係形成にほゞ同年齢の子どもを持っているという共通のファクターが大きく寄与していることは，どのインフォーマントからも聞くことができた。

> H夫人（47歳）：「以前はニューヨークのアパートに住んでいたのだけど，同じビルの人とは皆，知り合いだった。だからこちらへ引越してきてからとても寂しかったわ。それで子ども達に友達を家に連れて来るように言ったの。子どもを通じて誰かと会えるかもしれないでしょ？ 最初の友達はこうして得たのよ。」

> B夫人（44歳）：「子どもが幼い頃，同じ年頃の子どもをもつ，同じ通りの母親たちと知り合いになって，お互いに年齢や職業を知るようになりました。道の端で母親たちがかたまっておしゃべりしながら子ども達が危なくないよう見守っていたものです。同じ年頃の子どもをもっていない家族のことは同じブロックであっても全然知りません。また，私達の子ども達が大きくなってからこの通りに引越して来た人のこともほとんど分かりません。」

毎日，乳母車を押して散歩していると顔を合わせるので母親同士が親しくなった，幼い子どもを公園で遊ばせているうちに親しくなった，等々，どのように幼い子どもであっても母親達が絆を形成するきっかけを与えている。小学校に入ると子ども達の交遊はさらに活発になり，友達の家での遊び，昼食[6]や夕食への招待，夜の寝泊りがさかんに行なわれる。こうした子ども同士の交遊も全て互酬的である。また，昼間は小学生は徒歩5分の所でも，中学生は徒歩10分もする所は，また夜間なら同じブロックでさえ親が子どもを車で送迎することはごく普通のことである。送迎時には親も必ず家の中へ招じ入れられるから，子ども同士の交遊は親同士が接触する機会ともなる。

ほゞ同年齢の子どもを持つという共通点は親達をカー・プールによって結びつけることもある。登

表3

| 「親友」のエスニシティ ＼ インフォーマントのエスニシティ | プロテスタント | カソリック | ユダヤ系 | 総計 |
|---|---|---|---|---|
| プロテスタント | 25* (43.8) | 20 (35.1) | 12 (21.1) | 57** (100) |
| カソリック | 4 (9.5) | 27 (64.3) | 11 (26.2) | 42** (100) |
| ユダヤ系 | 5 (5.3) | 14 (14.7) | 76 (80.0) | 95 (100) |

*　数字は「親友」の実数。（　）内は%。

**　表2と数字にくい違いがあるが，それは，エスニシティに関する正確な情報が得られなかったケースは除外したからである。

下校を除いても，習い事やボーイ／ガール・スカウト活動，町のリクレーション委員会が主宰する各種のスポーツおよび音楽・芸術関係のプログラムや放課後活動に参加するためには，親が車で送り迎えしなければならない。またそれぞれの民族学校あるいは教会学校へ通っている子どもも多い。そこで母親達は数人でグループを組織し，順番に子どもの送迎をするようにしている。それが母親たちを結びつけるきっかけになることもある。

子どもを媒介しての友人形成および近隣関係に基づいたそれがプロテスタント，カソリック，ユダヤ系の三者に共通していることはすでに述べた。この三グループがコミュニティ内部で地理的な住み分けを行なっていないことを合わせて考えれば，三者の間にも親友関係が成立していることが考えられる。そこで，表3に51人のインフォーマントが「親友」としてあげた相手のエスニシティを3群別に集計してみた。

ここから次の諸点が導き出される。

1　3群ともに，3群内にしか親友を見出していない。

2　3群ともに，親友を自らと同じエスニシティの者に求める傾向が強い。特にユダヤ系は8割を自集団から選んでいる。カソリック，プロテスタントの順でその傾向は弱まる。

3　プロテスタントはユダヤ系よりもカソリックと緊密な結びつきを保ち，親友の約8割がクリスチャンである。

4　カソリックはプロテスタントよりもユダヤ系の方に親近性の紐帯をのばしている。

5　ユダヤ系は，クリスチャンの中ではプロテスタントよりはカソリックの方に親しみの絆を作り上げている。

三つのグループがそれぞれ親しい関係の主要部分を自集団の内部に作り上げているのは，友人形成の場として教会が重要な位置を占めていることとも関連するのは言うまでもない。また，プロテスタントの場合は，その最重要な場とされた任意集団として，愛国婦人会（National Society of the Daughters of the American Revolution）や教会の下部組織として発達した奉仕的団体，それに排他的

社交クラブや政治団体など，構成員の全て，もしくは主要部分がプロテスタントである組織が多くあげられているのだから，プロテスタントの中での友人形成の機会が多いのは当然であろう。

3グループの間では，プロテスタントは，ユダヤ系に対するよりもカソリックに対して受容的であるが，カソリックはユダヤ系に対してより親近性を示している。近隣関係において見られたように，友人関係においてもカソリックとユダヤ系の相対的な親しさが認められるのである。さらに，プロテスタントもカソリックもユダヤ系も，この三つのグループ外には親近性の強い紐帯を成立させていないことも明白となった。

## V　総括的考察

これまでの章において，内的・心理的共感を伴う関係を樹立する場合はプロテスタントとカソリックとユダヤ系がそれぞれ凝集性を示すが，3群の間には親疎に関して一定の傾向があること，同様の傾向は手段的関係においても見られることを示した。それは当調査地が含まれる全体社会の状況の反映であると同時に，当コミュニティへの三つのエスニック・グループの移入の歴史にも深く関わりを持つ。

当コミュニティ形成の始まりは第Ⅱ章で述べたように，オランダ人とユグノー派フランス人の開拓地に求められるが，程なくイギリス人の開拓村となり，以後，プロテスタントの伝統を基盤としたコミュニティが形成されて今日に至っている。カソリックのアイルランド人[1]が当コミュニティに移入して来たのは，本国アイルランドにおける，全人口を半減させた1840年代のかの大飢饉の後であった。彼らは大農場の労働者や家事使用人，あるいは庭師となってこのコミュニティに住みついた。彼らはローマン・カソリックが支配的な地方の農民や農場労働者の出身[2]で，信仰心が篤く，プロテスタントの伝統が根づいているこのコミュニティへの定着後も，周辺の地域社会のカソリック教会へ熱心に通った。そして早くも1873年には当町唯一のカソリック教会であるOur Lady Mount Carmel Churchを創立させている。

一方，イタリア人のアメリカへの来住は，1900年から1914年の間が最も激しかったが，当コミュニティへも1900年頃から定着が始まる。イタリアからの移民の多くは一団を組んで鉄道敷設工事を初めとする各種の工事現場の移動労働者となって各地を巡った。イーストウッドはその頃，鉄道の最終駅だったので終点まで来て踏みとどまり，農場の労働者や使用人となって住み着いたのが，イタリア人の当コミュニティへの移入の始まりだと言われている。イタリア人もアイルランド人も主に町の中央低地帯に住み着いた。

人口の大部分がプロテスタントで，それに少数のイタリア系とアイルランド系などのカソリックを含むこの町にユダヤ人が来入してきたのはいつ頃だろうか。イーストウッドの市史編纂家によれば，1900年頃，ひとりのユダヤ人が荷車に商品を積んでやって来て小売商を始めたのが始まりだと言うことである。彼はこの商売に成功し，その内，町に店を構えるようになった。が，反ユダヤ感情が強く，数年後に町内に住居を購入しようとした時に阻止されたと言う。第二次大戦後，1940年代，50年代を経過するに従い，ユダヤ人の中産階級化に伴って漸次，ユダヤ系家族が増加した。そして，60年代，70年代には東部丘陵地帯の1エーカー地区にユダヤ富裕層が大量に入居するに至ったのである。

プロテスタントのコミュニティに後来者としてカソリック系民族が，さらに遅れてユダヤ人が来住した後もなお，このコミュニティはプロテスタントの伝統を生活スタイルおよび価値観の基盤においたまま現在に至っている。

政治的にもエスタブリッシュメントであるプロテスタントの支配が一貫し，歴代の市長職と市行政

の要職およびほとんどの市議席を把握している共和党の母胎は，この町最大の教会である長老会派教会と，それと密接不離の関係にある排他的なニッカーボッカー・カントリー・クラブにある。

コミュニティの権力の中枢を掌握していたプロテスタントは，ユダヤ系の大量来住に対して，カソリックとの社会的距離を縮小し，「クリスチャン」としての自己規定を強めた。このことは，ニッカーボッカー・カントリー・クラブの会員が，かつてはプロテスタントに限られていたが，その後，カソリックであっても会員の保証と入会基準を満たす社会的地位があれば加入が認められるようになったこと（ユダヤ系は依然として排除されている）からもうかがわれる。明らかにこれは，「クリスチャン（もしくは Gentile)」対「ユダヤ人」という範疇化をもたらした訳だが，ユダヤ系は町の政治的権力をめぐってプロテスタントと競合関係に立つことはせず，彼らが最も関心を寄せている教育の分野での影響力確保を狙ってきた。筆者が調査中，市の教育長と教育委員の選挙が行なわれたが，当選した10人の教育委員のエスニシティの内訳は，ユダヤ系３名，カソリック４名，プロテスタント２名，アルメニア人１名で，教育長にはユダヤ系が選ばれた。選挙期間中の誹謗中傷合戦には遠慮も自粛も一点たりと言えども見られなかった。中にはユダヤ系同士が誹謗し合った場合もあったが，教育長選出にあたってはユダヤ系住民の尋常ならざる熱意が読みとれたのも事実である。

プロテスタントの側からカソリックに向けて発せられる「クリスチャン」としての範疇的自己規定は，プロテスタントの人々に友人や隣人のエスニシティを質問した際の返答にも非常によく表われている[3]。このようにプロテスタントがカソリックをも組み込んだ自己規定を強調するのは，第Ⅳ章において述べたように親友の多くをプロテスタントはカソリックをも含めたクリスチャンから選んでいることと無関係ではあるまい。これは対ユダヤ系という状況の下での民族集団範囲画定の力動性を示すものと見て良いだろう。

しかしながら，対ユダヤ人という戦略上，プロテスタントがクリスチャンという範疇的自己規定を強めたものの，それが効を奏したとは言い難い。それは，友人関係および近隣関係において，ユダヤ系とカソリックの親近性がひとつの特徴として示唆されたことによっても明らかである。マジョリティであるプロテスタントに対置される，「白人マイノリティ」としての自己規定・同類意識がユダヤ系とカソリックのコミュニティ生活における距離を縮小していると思われる。共にコミュニティの政治権力の枠外に置かれているマイノリティであるこの二つのグループは，コミュニティへの土着化の過程で，カソリックは市の行政や治安の下部機関での貢献，ユダヤ系は，前述のように市の教育行政に深く入り込むのみならず，公立学校の父母会を初めとする教育関係の任意活動で活躍するというそれぞれの固有性はあるものの，他方，どちらも市主催の子ども達のスポーツ・課外活動やボーイ／ガール・スカウト活動に積極的に参与し，無報酬のコーチ，監督，マネージャーを積極的に引き受けるなど任意活動の中心となっているという点で共通しており，相互接触の頻度を高めている。

相互交流が大きいことは一面では親近性を増す要因となるが，他面，２集団を対立・抗争に追い込むことも容易である。特にこの二者は「白人エスニックス」(white ethnics) とユダヤ系という構造的等価集団であり，何らかの利害争いの下ではどちらも集団的自己規定を強めて対立しやすい。

元来，プロテスタントのコミュニティであった当調査地では反ユダヤ感情が今なお保持され，さまざまな形で表現されている。大人は陰然とした形で表わすが，子どもの世界では露骨である。特に社会的障壁が現われるのは高校生の頃で，例えば排他的なニッカーボッカー・カントリー・クラブが主催する社交ダンスの講習会にはクリスチャンの子弟のみが招待されるなどのことがあり，自他のエスニシティを自覚せざるを得ない。このくらいの年齢の子どもによる，公共の場所やユダヤ系の家先のドライヴ・ウェイなどへのユダヤ人を攻撃する落書きも後を絶たない。筆者が調査中に発生した「スワスティカ[4]問題」もそのひとつであった。

それは，公立高校で休み時間にひとりの生徒が黒板にスワスティカを書いたことが発端となり，その件でユダヤ系および反ユダヤ主義に批判的な親達が学校に集結して討議している間に，駐車場に停めてあった彼らの車にスワスティカがペンキで落書きされていたという事件だった。警察の捜査で3人の少年が犯人にあがったが，ひとりは警部補の息子ですぐ釈放された。残りの2人は有罪になり，罰金100ドルと，ユダヤ人大虐殺（ホロコースト）関係の書物3冊を購入して読み，リポートを提出することが課された。犯人の少年達は，公けにはされなかったが，市行政府の下級官吏の子弟であるとの町中の専らの評判であった。一般的な印象としても，また人々の発言からも，警察，消防，塵芥処理等の下級吏員の中に反ユダヤ意識がことに強いように思われる。そしてこうした部門に貢献しているのはイタリア系やアイルランド系のカソリックであることも事実である。

ユダヤ系とカソリックの対立は，同様に「遅れてやって来た」者同士の社会的・経済的・政治的資源をめぐっての利害対立関係がもたらしたものだが，イーストウッドに関しては，コミュニティ内の地理的居住地に社会経済的地位，それにエスニシティが結合して象徴化されている点にも注意しなければならない。プロテスタントもカソリックもユダヤ系もそれぞれの民族的背景を持つ人々が別個に集住している地区はない。これ以外のエスニシティのものも含めて混住している雑居状態が現実である。ところが，1970年代に開発された東部丘陵地の1エーカー地区には，町全体の人口比を上まわる多数の上層中産階級ユダヤ系が居住しており，東部丘陵地と言えばユダヤ系を象徴している。一方，鉄道線路沿いの中央低地にはイタリア人やアイルランド人の労働者が来住初期から住み着き，彼らは土着化の過程で世代を更新する毎に次第に西部微高地へ向けて居住区を拡大して行ったため，中央低地帯から西部微高地にかけての地区はイタリア系やアイルランド系等下層ないし中層中産階級カソリックを象徴している。

ところで，東部丘陵地と西部微高地の住民は，相互に，ある意味で社会的対立状況を示しており，前者は後者に対して一種の蔑視感情を，後者は前者に対して羨望と敵意を表わす。この「東部丘陵地（イースト・ヒル）対西部微高地（ウエスト・ヒル）」の反目の意味するところは，従って，社会経済的に上層対下層ないし中層の中産階級の反目であるのだが，それぞれがユダヤ系とカソリックを象徴しているため，単純化されてユダヤ系対カソリックというエスニシティの異なる集団間の反目に置き換えられてしまっていると言える。

以上のように，カソリックとユダヤ系は，一方で後来の白人マイノリティとしての共通性ゆえに相対的に緊密なネットワークを築き，日常生活においても近隣者として頻繁な相互接触を行なっているものの，他方で社会的・政治的・経済的資源配分をめぐっての競合関係がそれぞれの集団の自己意識を強化し，相互に対立をもたらしているのである。

ところで，プロテスタントとカソリックとユダヤ系は，第Ⅲ，Ⅳ章で考察したように，それぞれの範疇内での凝集性はあるが，手段的関係においても内面的・心理的関係においても決して相互に完全に閉鎖的である訳ではなく，程度の差はあるが相互交流が行われている。一方，この二つのレベルでの相互行為から「非白人」は全く除外されている。明らかにそこには，「非白人」に対置される「白人」，すなわち"Euro-American"としての範疇的区分，同類意識が見られる。さらに言えば，挨拶や立ち話のレベルでの相互行為は東洋人，印度人，中近東出身者にまで拡大される。だが，黒人に対してはこのレベルでの相互交流すら受容しようとはしない。

そもそも当コミュニティのプロテスタントとカソリックとユダヤ系は，黒人のコミュニティ移入については完全に共通の態度をもって反対し，阻止してきた。1980年センサスによれば黒人人口は約80人となっているが，その多くは住み込みの子守りまたは家事使用人である。当地では主婦が職業を持つためには黒人使用人は不可欠の存在だが，専業主婦であっても週1，2回は通いの黒人女を雇っていることが多い。こうした黒人使用人は社会的に全く見えない（見えないことになっている）。町の

人々から見えるような場所には出て来ないうえ，来客に対しても挨拶もしなければ紹介もされない。彼女らはそこに存在しないのである。ひたすら家事をする機械のように処遇されていると言っても過言ではない。プロテスタントもカソリックもユダヤ系も，このような使用人としては黒人をコミュニティに受け入れるが，独立居住者として移入して来ることに対しては拒絶的である。公民権法を推進する団体，住宅供給公平化委員会（Fair Housing Committee）の指導で黒人家族は常時，交替は激しいが少なくとも２，３家族は当町に居住しているし，また，黒人白人通婚夫婦もいるのだが，彼らもまた，社会的にも物理的にも全く見えない。近隣関係のネットワークにも入らず，転入も転出も隣人すら知らぬ間に行なうから，近隣の人々は黒人家族の出入に関して確かなことを知らないのである[5]。

きわめて単純化して言えば，プロテスタントとカソリックとユダヤ系は，対黒人関係においては，"Euro-American" としての自己規定よりさらに拡大された，コミュニティの住民としては許容しているアジア系などの非白人まで含めた「非黒人」という範疇画定を共有しているということになるであろう。

以上のことから，「プロテスタント」，「カソリック」，あるいは「ユダヤ系」としての自己規定，「クリスチャン」としての，「白人マイノリティ」としての，"Euro-American" としての，さらには「非黒人」としての範疇的自己規定というように，複数レベルでの重層的，非固定的なエスニシティが存在し，他集団との相互行為や係争点，その他の状況に応じてそのいずれかのレベルのエスニシティが顕在化することを明らかにすることができたと思う。

本稿は東部の一コミュニティに焦点を絞った研究だが，このような比較的同質的なコミュニティにおいてすら複雑で流動的，多元的なエスニシティが存在するのである。ましてや，より多種類の民族集団や人種集団を包括するアメリカ全体社会のマイノリティ問題や人種関係を論ずる際には一元的，表面的に捉えず，多元的，重層的な視点をもってすることが何よりも肝要であろう。

〔註〕

I

(1) 江淵　1983　p.518

(2) Barth, F. 1969. pp. 9-10

(3) Cohen, A. 1969. p. 4

(4) Milardo も，中産階級の夫婦に関する過去の実証研究を概観して，夫婦の社会的ネットワークには共通部分が非常に多いことを指摘している。Milardo, R. M. 1982. p.163

(5) 本調査に基づき，第36回日本人類学会・民族学会連合大会（1982年10月）および人類働態学会第20回大会シンポジウム＜ヒトの労働と家族＞（1985年７月）において報告した。有益なコメントを下さった方々に記して謝意を表する。

II

(1) ニューヨーク市（マンハッタン，ブロンクス，ブルックリン，クィーンズ，スタッテン島），ニューヨーク州の７郡，ニュージャージー州の９郡，コネティカット州の１郡に拡がる地域を指す。

(2) Seeley, J. R. et als. 1956

(3) このコミュニティの歴史に関する資料は，主に市史編纂家 V. Mosley 夫人のコレクションおよび D. B. Mazur 氏の未刊行博士論文から得られた。長年蓄積された資料を惜し気もなく見せて下さったこのお２人には特に感謝の意を表したい。

(4) 地域の利用法を定めた規則。

(5) 不動産業者が見せる，公立学校生徒を対象とする州統一到達度テスト（State Minimum Basic Skills Test）

のボロ別スコア一覧表は，客が家選びをする際の重要な情報となる。

Ⅲ

(1) 住人の卒業・婚約・結婚・死亡等，通過儀礼に関する事項が地元の新聞に個人名入りで詳しく報道される。当コミュニティの地元紙は，四つのボロを包括するタブロイド版90頁の週刊新聞で，無料で全戸配布される。

(2) Eames, E. & J. G. Goode, 1977. p.120

(3) 郊外住宅地では盗難事件が多発し，留守中，被害にあったことが一度もないという家は少ないと言われている。大型トラックで乗り着け，引越しを装って家具を全て運び去るなど大胆な犯罪が横行しているので，近隣者同士はしばしばお互いに"house watching"をしている。

(4) 一般に白人中流中産以上の階層では現金の貸借はしないと言われている（例えば Mullings, L. (ed.) 1987. p.228 など）が，実際には少額の貸借は行なわれている。

(5) Gans, H. J. 1962. p.634

(6) インフォーマントの大多数が，人を雇うか母親か姉妹に頼む，と答えた。

(7) Yuan, Y. 1975. p.88

Ⅳ

(1) Allan, G. A. 1979. p.36

(2) Yuanも，アメリカ東北部の郊外住宅地での調査でインフォーマント達が厳密に区別していることに注目している。Yuan, Y. 1975. p.91

(3) Allan, G. A. 1979. p.41. また，Firth, R. et als. (1969) や Schulz, C. M. (1968) も同様のことを述べている。

(4) Hsu, F. L. K. 1963. 作田・浜口共訳 pp.202-204

(5) それが深夜徘徊となり，さまざまな非行に結びつくこともまれではない。少年非行は親が社交に出かける金曜日夜に最も多発するので，この日は町のパトカーはフル出動とのことである。侵入窃盗犯を捕らえてみれば，その家の息子の友達だった，息子の友達の友達だったという話をよく耳にする。留守になるという情報が予め伝わった上での犯行なのである。

(6) 小学校に給食制度はなく，原則として昼食は自宅に帰ってとる。事情があれば申告し，昼食を持参しても良い。

Ⅴ

(1) 17世紀初期の開拓時代にもアイルランドから年季奉公人として多数の人々がアメリカ東部へ来住しているが，彼らは年季が明けると解放され，他民族出身者と通婚してカソリックであることをやめ，急速にプロテスタントの中に同化してしまった。"Catholic Irish" とは19世紀半ばに来住した人々を指す。

(2) Cunningham, B. (ed.) 1977. p.271

(3) 筆者がエスニシティを尋ねると，始めは「クリスチャン」と答え，さらに宗派を尋ねると漸く「プロテスタント」ないし「カソリック」と答えたプロテスタントが多かった。

(4) ナチス・ドイツの国章であるかぎ十字のこと。ユダヤ系への嫌がらせにしばしば用いられる。

(5) 調査の最終段階で一黒人家族の妻にインタビューすることができた。この町に移入する際，家屋敷の下検分も引越しも，夜間，闇に紛れて行なったと言う。

〔参考文献〕

Allan, G. A., 1979, *A Sociology of Friendship and Kinship*, London: George Allen and Unwin.

綾部恒雄 1985「エスニシティの概念と定義」『文化人類学２』 pp. 8-19 アカデミア出版会，京都。

Barth, F., 1969, *Ethnic Groups and Boundaries*, Boston: Little, Brown and Company.

Boissevain, J., 1974, *Friends of Friends: Networks, Manipulators and Coalitions*, NY: St. Martins Press.

Cohen, A., 1969, *Custom and Politics in Urban Africa*, University of California Press.

Cunningham, B., 1977, *The New Jersey Ethnic Experience*, Union City, NJ: Wm. H. Wise and Company.

Dobriner, W. M., 1958, *The Suburban Community*, NY: G. P. Putnam's Sons.

Eames, E. & J. G. Goode, 1977, *Anthropology of the City: An Introduction to Urban Anthropology*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.

江淵一公　1983　「象徴体系としてのニュー・エスニシティ——アメリカにおける民族活性化運動の社会人類学的分析への一視角——」江淵一公・伊藤亜人編『吉田禎吾教授還暦記念論文集　儀礼と象徴——文化人類学的考察——』pp.515-542　九州大学出版会。

———　1985「エスニック・バウンダリーとスティグマ——ニュー・エスニシティの視角」『文化人類学２』pp.20-33　アカデミア出版会，京都。

Fava, S. F. 1956, "Suburbanism as a Way of Life," *American Sociological Review*, Vol. 21, No.1, pp. 34-37.

Firth, R., Hubert, J. & A. Forge, 1969, *Families and Their Relatives*, London: Routledge and Kegan Paul.

Gans, H. J. 1962, "Urbanism and Suburbanism as Ways of Life: A Re-evaluation of Definitions," (in) Rose, A. M. (ed.), *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, London: Routledge and Kegan Paul.

Hsu, F. L. K. 1963, *Clan, Caste, and Club*,Princeton,NJ: D. Van Nostrand&Co.,　作田啓一・浜口恵俊共訳　1971『比較文明社会論』培風館。

LaGumina, S. (ed.), 1980, *Ethnicity in Suburbia: The Long Island Experience*, NY: Nassau Community College.

Martin, W. T., 1956 "The Structuring of Social Relationships Engendered by Suburban Residence," *American Sociological Review*, Vol. 21, No. 4, pp. 446-453.

Mazur, D. B., 1981, "A Comparative Study of Developmental Growth of Three Townships in Northern New Jersey," Unpublished Ph. D. dissertation, Rutgers University.

Milardo, R. M., 1982, "Friendship Networks in Developing Relationships: Converging and Diverging Social Environments," *Social Psychology Quarterly*, Vol. 45, No. 3, pp. 162-172.

Mitchell, J. C. (ed.), 1969, *Social Networks in Urban Situations*, Manchester University Press.

Mullings, L. (ed.), 1987, *Cities of the United States: Studies in Urban Anthropology*, Columbia University Press.

Packard, V., 1972, *A Nation of Strangers*, NY: David Mckay Co. Inc.,　風間禎三郎訳　1973　『見知らぬ人々の国』ダイヤモンド社。

Schnall, D. J., 1975, *Ethnicity and Suburban Local Politics*, NY: Praeger Publishers.

Schulz, C. M., 1968, *All About Friendship*, NY: Hallmark.

Seeley, J. R., Sim, R. A. & E. W. Loosley, 1956, *Crestwood Heights: A Study of the Culture of Suburban Life*, NY: Basic Books.

Spectorsky, A. C., 1955, *The Exurbanites*, Philadelphia: Lippincott Co.

Stein, M. R., 1960, *The Eclipse of Community*,　Princeton University Press.

Whyte, W. H. Jr., 1957, *The Organization Man*, NY: Doubleday,　辻村明・佐田一彦共訳　㊗1959『組織のなかの

人間』東京創元社。

Yuan, Y., 1975, "Affectivity and Instrumentality in Friendship Patterns Among American Women," (in) Raphael, D.(ed.), *Being Female: Reproduction, Powers, and Change*, The Hague: Mouton.